校威高揚への提言

八重樫　昌宏（新4回生）

石桜精神に育まれて来た者の一人として、最近入学希望者が少なくなって来たということを耳にするのは、誠に残念である。

いくら石桜精神云々といったところで、生徒が集って来なければ空念仏にすぎないからである。

どうすれば校威が高揚されるのか、つまり入学希望者が殺到する学園にするにはどうすればよいか、七〇周年の記念誌にこんな事を書くことについては、ためらいもあったが、この機会を置いて外にないと思い敢えて専門外のことについて提言する次第である。

今の中学、高校は、そこで学ぼうとする者にとって何だろうか？　いうまでもなく大多数の生徒にとって、それは大学への玄関口である。良い大学への玄関口であれば、志願者は殺到するのは自然の理である。

従って校威高揚のためには、しっかりした大学受験体制の樹立が必須である。ところで、粒よりの生徒を集める事ができれば何の苦もないわけだが、県立一流校がこれほど多くなった状況下では、粒揃えは不可能というべきであろう。

わが校は高偏差値から低偏差値までのバラツキの多い多彩な集団であり、これは今に始まったことではない。ただ時代によりその比率が変化するだけである。このような集団の教育を県立校と同様のやり方でやっていたのでは、事態は改善されず、悪化の一途を辿るであろう。

このような玉石混交集団は実社会そのもののようであり、かえって活力に富み、多彩な個性

と温かい友情の通い合う集団であり、しかも社会性の錬磨には適した集団であるが、学業を教えるのには非常に難しく、キメ細かな対策が必要である。

英語教育を例にとって、現状打開のための私案を示させて頂きたい、

幸いと云っては差しつかえがあるが、県立一流校の英語教育のレベルは全国的に見て高い方ではない。ここに突破口があるのではないか。

㈠、わが校独自の中高一貫教育を前提とした五段階テキストと教育プログラムの編成、

現在の中学英語は高校英語との連続性が希薄で無駄が多い。

初級段階は身近な事柄を英語で表現することから始める。過去・現在・未来などを文法としてでなく表現として教える。英語に対する興味を強く刺戟することから始める。

併せて辞書の引き方を訓練しつつ、単語、連句慣用句の習熟のためディクテーションを早期から始める。文法は知識の整理だから始めるのは国文法を習うと同時でよい。

上級になるにつれて英語スピーチ、討論、英検受験なども取入れチャレンジ精神を刺戟しお山の大将を作らぬようにする。

高二階段で現在の高三のレベルを終えるものとする。(勿論ついて来れない者も多数出る筈である。それに対しては補修で対応する。)

高三では専ら受験対策をその道のプロの指導の下に行う。

㈡、中、高の区分を撤廃し、五学年、一五クラス編成(一学年上中下の三クラス)とし同一学年同一テキストとする。当然の事ながらクラス毎に進度の差が生ずる。理解力に合わせたクラス編成であるから当然である。年三回、考査によりクラス替えを行う。クラス替えには学年の壁は設けない。また、テキストを所定期間より早く終わったクラスは学期に関係なく次の学年に進むことができる。一年間に所定の教程を終えることができない恐れのある者には補習授業を行い頑張らせる。

㈢、新システムの導入方法

全校一斉の実力テストによりクラス分けをすれば良いのだが、現在目前の受験勉強の支障にならぬよう高一以下から始めるのが至当と思われる。

数学についても前述のような教育プログラムが構築できればなお良い。中学の数学には英語以上の無駄があると思われる。

新システムを平成九年度の高一から導入すれば、四年目からは、一流私立現役合格一〇名、二、三流どころで五〇人位は合格ラインに達し残余の者も自分の能力と個性を生かした進路に進むことができるであろう。かくして、石桜教育の評価が高まり志願者は急増するであろう。

新システムはかなりの人件費の増加を伴うと思われるが、入学者の増加によってやがて充分カバーされると予想する。

いずれにせよ、校威不振の原因を学園側で正しく認識し、具体的な対策を強力に打ち出し同窓生や父兄に協力を求めることが、肝要ではないだろうか。

私学は建学の精神を広く末長く流布することに存在意義を有すると云われるが、以上流布すべき対象の拡大策について一つの提案を行った次第である。次にその徹底策について論じて見たい。

私は石桜精神は校歌にわかり易く示されていると思う。難しい説明は抜きにして、校歌を具体的に実感せしめるのが先決ではなかろうか。

桜花の凜々しさと巨岩を押し割って幾百年も生長する堅忍不抜の生命力、これを具体的に若人の魂に焼き付けることが我が校の根本的命題であるとするならば、入学時における学校長による校歌、校章の由来解説は勿論、満開の石割桜を囲んでの校歌斉唱、または学校から石割桜までのパレードなど石割桜との一体感を社会にアピールするイベントなども面白いと思う。

我が校は、バラエティーに富んだ若人が、石桜精神を基調に温かい友情を育みつつ、それぞれの個性と能力に応じて最大限錬磨される学園であって欲しいと念願するものである。

（岩手県北バス株式会社社長）